



大学生による大学生のための「国際協力」情報誌 ©Mamoru Itoh (写真) ルアンババーンにて、釘で遊ぶ子ども (ラオス)

Blau「ブラウ」

ドイツ語で青をあらわす言葉。

国境を越えてあらゆる情報が伝わってくる今日、私たちは青い海の向こうで 起きている様々な問題を知る事も見る事も出来るようになった。

そんな中で「なぜ」という問いがきっと浮かんでいるはず。

情報が蔓延する世界で、わたしたちは どんな手段を選択をしていくのか。

「国際協力」というと、ちょっと堅苦しい感じがする。

でも、意外とわたしたちの周りには 「できること」が転がっているし、 探しだすことも、考えることもできる。

それらを伝える事で、そこから「誰かが世界に手を伸ばす。」 きっかけを提供できたら。「考える」きっかけができたら。

そんな思いを込めたフリーペーパーです。

CONTENTS

p4.6

JAPAN PLATFROM

~世界の潮流を見据えて~ 国際舞台で活躍する NGO を取材

p8.9 Peace winds Japan

国際社会への発信と企業との連携

p10.11

JEN

自立への三本柱を通して

Think globally act locally 机上を越えて活動する若者たち

p14.15

Youth for 3.11

震災支援から見えてきたボランティア

p16.17

Habitat MGU.

ひと掻きの重さ、学生の手で村の活性化を

p18.19

編集後記

©Mamoru Itoh

*写真 夕焼けとハロン湾(ベトナム)



政府・企業・NGO で新しい枠組みの誕生

ジャパンプラットフォームは 2000 年の 8 月にできた組織です。日本の多くの NGO、特に海外で緊急人道支援を行っている NGO は、支援者の方々のご寄付で成り立っています。例えば災害・地震がおきた場合、その時点で「みなさんご寄付お願いします」と募ってから、活動が始まります。しかし、緊急人道支援の実態として地震ならば瓦礫の下に埋まってしまった方々を救出するのに 72 時間が一つの目安であり、救出が遅れれば生存率が著しく低下します。故に、緊急人道支援では迅速に現場に行くことが求められます。現場には、日本だけでなくいろいろな国の NGO が来て、どんな形でやるかなど、内容の役割分担をしますが、始めから準備が整っていなければ良い支援活動ができません。大事なことは災害が起こったらすぐ資金を必要な団体に拠出できる状態にあり、平時からお金をプールすることによって、災害が起きたらすぐ出動できるようにすることでした。NGO の中では常に出動準備を用意できるようにするという意識は高く、同時に日本の経済界でも CSR という言葉が使われるようになって、企業として営利活動するだけではなく、できれば自分たちの本業を通じて社会に貢献したりする動きが活発となりました。

例えばフィリピンで洪水が起きた時に、現地に工場を所持している企業さんは、従業員が働いている地域でもあることから支援活動をしなければいけないという空気がありました。実際に企業が支援している所や、その地域に入っている NGO を支援する所もありました。その中で企業の方からも NGO を通して何か貢献したい、支援したいという考え方がありました。さらに外務省としても NGO と組む事で迅速に支援の体制を構築する必要があり、その中で、政府のお金と民間のお金を両輪で動かす必要があるという考え方がでてきました。あらかじめみんなでお金をプールし、連携して活動する仕組みを政府・企業・NGO の三者が集まって活動するために出来たのが JPF です。



写真(上) モニタリングを行う JPF スタッフ (フィリピン)。

NGO に対する JPF の効果

JPF ができたことで緊急時のために資金を蓄積され迅速な活動することができ、今まで活動できなかった NGO が経験を積むことができました。支援現場からの視点でいえば、日本からの支援がより多く、より早く現場に届くようになり、JPF の資金も加盟 NGO も増えてきました。現在は 36 団体、海外の支援活動のための資金は約 2 0 億円の予算があります。実績として 1 年間で 6 0 件の支援が、ここ 5 年は 1 0 0 件を越えるようになり、去年の東北の災害で計 2 0 0 件くらい事業を展開することができました。その背景には、企業と NGO の連携が進んだことがあげられます。例えば、日本郵船さんは船を所持しているから無償で支援物資を被災地に届けるだとか、JAL さんや ANA さんは無償で航空券を NGO のために手配していただくなどのご協力があり、資金をより現地で使えるようになりました。これは JPF が窓口をやっています。

阪神淡路大震災後、日本のNGOに対する日本人の見方が変わってきたと聞いたことがあります。以前、私は別のNGOで活動していましたが、両親などにとってはボランティアじゃ食べていけない、やる気のある人たちがボランティアで活動しているだけ、というイメージだったようです。日本にはインドシナ難民の時に多くのNGOが出来ましたが、細々と活動していました。阪神の時に日本のNGOは少なからず注目されましたが、その時にボランティアとの境がよく理解されていませんでした。そして去年の東北、政府が動けなかった中、NGOがたくさん活躍し、日本のNGOに対する見方がまた変わり始めたように思います。寄付額も増え、事業の規模も拡大したのはその表れではないでしょうか。

JAPAN PLATFORM

日本と海外の NGO の比較



JPF の加盟団体は大きく分けて二つあって、日本で生まれた NGO と元々世界のどこかで活動している支部が加盟しているとの二つです。認識の違いとしては、欧米は NGO の仕事につくことはとても人気があります。資金の規模も違い、日本だとまだまだ NGO はアマチュアだというイメージがあります。欧米では専門性が高く、プロが集まっているという認識がされています。また構造として、支援者の層が広く継続的に支援されています。システム的にもよく整備されていて、開発途上国にも多くのオフィスがあります。日本の NGO では規模が小さくても、現地の人々と一緒にきめの細かい支援活動をしている団体が多いような印象を持っています。

JPF は中間支援組織のため、欧米と比較されるべきは NGO をまとめている組織です。例えばアメリカのインターアクションでしょうか。欧米の NGO は戦略面で、政府に提言をしたりしていますが、JPF はお金を拠出し、活動のモニタリングや評

価を実施するところが違います。なぜ欧米に JPF みたいなところがないかというと、現実的には個々の NGO の資金力が大きいからではないでしょうか。日本の NGO はまだまだそこまで大きくないので、自力でお金を集めていくのは難しいのです。考え方によっては、最終的に日本の NGO が大きくなり、自力で他の組織と連携したり、様々な分野の方々から支援を受け、まとめる能力がもっと上がれば、JPF がいらなくなる日が来るのではないかとも思っています。 JPF の強みは経団連や外務省などの組織が活動に参加していることです。企業さんにも一般の方にもよく聞かれるのはどの NGO を信用していかわからないということです。しかし JPF は様々な組織と連携し、協力して活動していることもあり、信頼してご寄付をお寄せいただけているのだと思います。



写真(上)洪水発生時の避難所 (フィリピン)。

JPF 参加 NGO ユニットとの課題

課題として共通のゴールに向かって対等なパートナーシップを築くことが挙げられます。NGO ユニットはメンバーの一部であり、どうやって意見を吸い上げ、どうやって協力していくかは常に考えなければいけません。JPF は本来、NGO が現地で良い活動するためにある組織です。しかし、JPF は資金的な助成をするので、加盟している NGO と JPF の関係は、ドナーである=少し上の立場から、NGO に助成してあげているという意識が生まれてしまいがちです。また NGO からしても JPF はドナーだと思いがちです。しかしそうではなく、JPF は NGO のためにあり、重要なのはより一体感を持って活動するにはどうしたら良いかだと思います。JPF は NGO のパートナーでなければなりませんし、JPF は NGO がなければなりません。どちらかが上とかではなくて、一体にならなければいけないと思います。

しかし、やはりお金を出しているから難しいとも感じます。 NGOとしては資金は欲しいが何かに縛られることなく自分の好きな活動をしたいと考えるのも理解できますし、難しい問題です。上下の関係になっていると良い支援が出来ないとも思います。でも活動の原点に立ち戻り、「本当に良い支援、効果のある支援とは何か」を考えていけば、複数の団体が連携・協力し合って活動することが重要であるという共通理解に至るのではないでしょうか。例えば、私が以前アフガニスタンで働いていた時、シェルター事業をやっていました。アフガンから難民になった方は母国が落ち着き始め、帰ることになりました。その時必要だったのはまず家でした。しかし家だけではなく、仕事、教育など、多くのことをやらなければ、家族全員が故郷



写真(上)避難先で姉に寄りそう弟 (フィリピン)。

で再び生活を始める、いわゆる「再定住」を実現するのは難しいのが実情です。そしてそれは一つのNGOだけではできないし、限界があると思います。だからこそ、それぞれが集まってやることが重要なのです。役割分担をしたり、相互に補完しあう活動をすることや情報を交換して足りないものをもらったり、良い方法を聞いたりとJPFとして活動するとメリットがあります。その時にドナーと受け手になっていると、うまくいきません。パートナーとして共通の目的を実現するためにどのように知恵を出し合えるかが、成功の鍵だと考えています。

国際協力のファッション化

誤解を恐れずに言えば、ファッション化が全部悪いことではないと思います。それは知ってもらえるからです。それがクールだと思ってもらえます。私自身もクールだと思っているし、興味を持ってもらうのは良いことです。ただ、やりたい側の視点で考えすぎている場合があることが心配です。実際に現地の方にどのようにに良い影響をあたえているか、もう少し考えてほしいのです。必ずしも私のように生活の糧にしなくても良いですが、本当に現地のためになっているか、やることだけではなく現地の方とどう一緒にやっていくのか見てほしいです。それが良い支援に繋がると思います。現地というのは日本にいると見えてこないものが見えてきます。日本ではあれは良い、悪いと報道されがちですが、現場に行くと良いとも悪いともいえない複雑性があります。その複雑性を知ってほしいです。きっかけはたとえファッション化でも良いから現場に行き、そして複雑さ、問題の深さ、現地の人が実際にどんな風に考えているかを知る努力をしてほしいです。現地の人は外国からはるばる来でもらっているから、最初は歓迎してくれるかもしれませんが、より深い関係になっていくと、迷惑と思っていることに気付くこともあります。それに現地の人も時間などを投資しています。こちらは好きでやっているから良いが良い支援ではない場合、現地の人に申し訳ないと感じます。

私が最初に被災地に行って思ったのは何もできないということでした。その時は現地の人にたくさんのことを教えてもらいました。自分の泊まるテントすらもありませんでした。自分がいきなり行ってなにかできるというのは大きな間違いで、色々教えてもらっていく中で、非力だけれど自分でも何かできないかというスタンスでやると大きな間違いはなく、良い支援になると思います。そういうことを感じられた機会に恵まれたことはNGOにきて良かったと思っています。個人の経験からすると、もし現地のことを知らずに国連に行って上のことだけ見ていたら、もっと高慢で役に立たない人間になっていたかもしれません。NGOに来て、支援活動は共同作業であること、自分の出来ることには限界があることを学べたことが私の活動の原点になっています。



将来、国際協力に携わりたい人へ

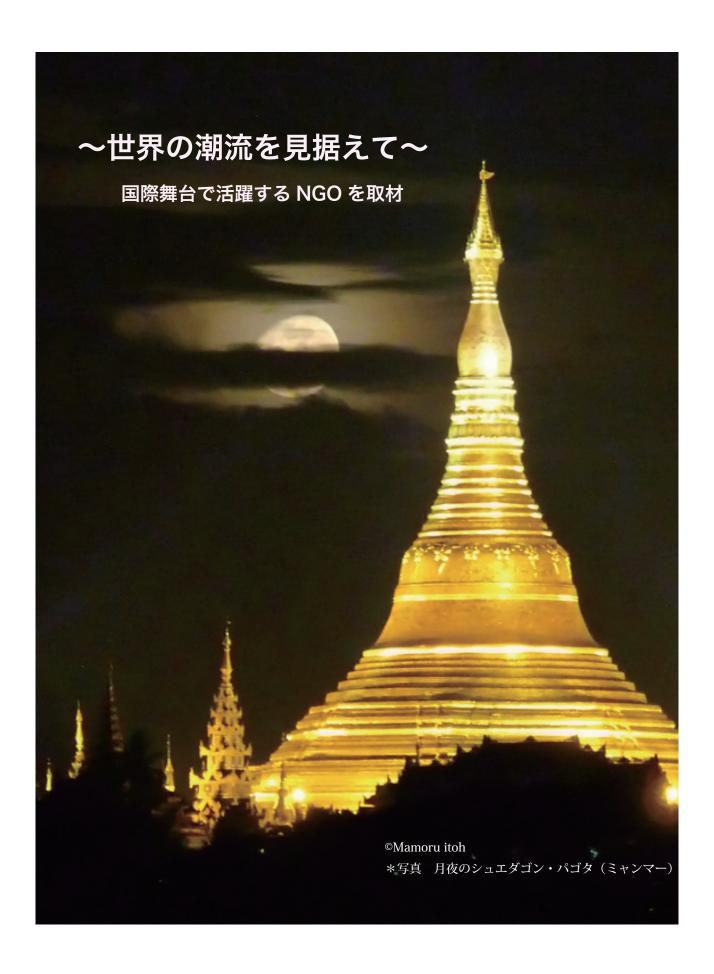
写真(上)避難所で支援活動を行う JPF スタッフ (フィリピン)。

私はまず国際協力やりたいと思った時に、まず国連に入りたいと思いました。それは間違っていないと思いますが、国連には国連の役割があります。ざっくり言えば国造りの大枠を考えることです。そのようなところで国際協力に関わりたいのなら国連は良いと思います。しかし国際協力をやりたいと思った時に、もう少しあなたが関わりたいと思うその理由を深く考えなければいけません。どういうことをやりたいのか、何に喜びを見出すのか。例えば被災者方の笑顔になる所を見たいだとかです。一度一緒に努力する喜びを味わうとやみつきになります。私は一度、ある村で井戸掘りの事業をしていた時に、いろいろな村を回っていました。井戸というのは村によって必要不必要があります。井戸は欲しければいくらでも欲しいので、たくさんの村から欲しいと言われました。私はアフガンのある村を支援することに決めました。なぜならば、村人が自分たちでできることを話し合えるところだったからです。自分達はこれができるからここだけ手伝ってほしいということを話し合える村だったからです。例えば道がでこぼこで私達が機材を運んでこられないことを相談すると、村人が自分たちで道をならすから大丈夫と言ってくれました。また、井戸は1日でできないから機材を何処かに置いておかなくてはならず、盗まれてはいけないから困っていた時に、村人が村長さんのところにスペースがあるから、そこに置いてくれればしっかり見守ると言ってくれたのです。

こちらがやる人向こうが受ける人の関係ではないのです。向こうもこうやるから、こちらもこうやるという話し合いが重要であり、支援活動は共同事業だと思います。こちらがやってあげるだけの関係は必ずうまくいかないです。現地のことは現地の方の方が詳しいですし、現地の人も考えている中で、しかし現地の人だけではできないところを支えていくべきだと思います。より現場でやるのがNGOであり、現地政府とうまく関係を築き、国造りにかかわるのが国連だと思います。役割の違いでありどちらも重要なのです。日本だと国際協力となるとすぐ国連となります。それも良いですが、現場で良い活動しているNGOはたくさんあるし、それが認知されていないのがもどかしいです。NGOの活動が認知されるようになりたいし、究極的に良い支援するには、それぞれが協力して行ったほうが良い支援できると信じているからこそ、私はJPFで働いています。



取材協力:JPF 事務局長 権名さん インタビュアー:JPF 学生 Net 伊藤



Peace winds IAPAN



アジアでの活動・スリランカと東ティモール

*写真(上・左)コーヒー農園の子ども達 と収穫されたコーヒー豆(東テイモール)。

スリランカでは、2009 年から活動を続けています。20 年以上にわたる内戦によって、国内外に避難していた避難民が故郷に戻ってきているのですが、そこで目にした故郷の土地は荒れ果て、インフラも十分に機能していない状態でした。そこでPWJ は帰還民が安定した生活を始められるための支援として、シェルター(仮設住居)の提供や、小学校の建設、生計支援パッケージの配布などを行ってきました。現在は東部トリンコマレと北部ワウニヤというところで活動をしています。多くの帰還民は、生計を立てるための必要な器具がないため、ニーズに応じて農業パッケージ(稲作、野菜栽培、農機具など)や酪農パッケージ(養鶏やヤギなど)の配布を行っています。これにより生計手段を拡大した方々も多く、収入を向上させて商店の規模を拡大するなど効果も出ており、再定住への動機づけとなっています。

東ティモールでは、1999年9月末、住民投票前後の混乱に対応してPWJは食糧など物資の配給、医療支援、住居修復などの緊急人道支援を行いました。その後、荒廃した土地で、教育水準も低い住民の自立を図るため、PWJが着目したのが、もともとポルトガルの植民地だったときに持ち込まれたコーヒーの木でした。2003年からは、コーヒーの品質向上支援の取り組みを本格化。赤く熟した実だけを選別して加工することや、収穫後すぐに果肉を落とすことなどを、きめ細かく指導しました。収穫量に毎年のブレがあるなど、農作物を扱うことが難しいなど課題にも直面していますが、希少性のある東ティモールのコーヒーの質の向上を目指すために努力を重ねています。そして、次世代のリーダーとなる方々が輩出され、将来的には自立した生産体制、販路開拓などを担っていってほしいと願っています。



*写真(上)収穫されたコーヒー豆の選別(東テイモール)。

海外での活動が日本でどのように活かされているか

海外での支援活動の経験から、学ぶことは失敗も含めて多くあります。過去を振り返って、こうした経験が活かされた例としては、東日本大震災での初動対応があります。日本の大規模災害において、緊急時にどのような判断を下せるか、迅速に現場入りをすることができるか、また現地のカウンターパートと協調性をとりながら支援に向けた妥当な調整に対応できたのは、海外で緊急人道支援での経験を積んだ人材がいたからこそだと思います。震災後に新しく立ち上がったボランティア組織なども多くありますが、初動対応に関しては、海外で支援実績のある人材と事業のマネジメント力があり、JPF 加盟団体としてのネットワークが活きた部分もあったと思っています。

~世界の潮流を見据えて~

緊急人道支援活動の引き際とは

peace winds

答えがひとつでないので、すごく難しいですね。緊急期から復旧・復興期、そしてとりわけ自立支援、つまり開発期への移 行を見極めることは、悩み続けなければならないと思っています。この国で成功した支援パッケージが、違う国で通用するか というと、そうはいきません。現場では常にアンテナをはり、ニーズと必要性を見極めるようにしています。たとえば、井戸 を作ったらそこで支援を終わりにするのではなく、その後に適切に井戸が使用されているか、住民が主体となって管理を行っ ているか、などモニタリングを行います。ニーズはいくらでもありますが、そのニーズに応えるのが政府や自治体なのか、企 業なのか、それとも NGO なのか、私たちが担うべき役割を認識しながら判断を行っています。もちろん、資金や人材など限ら れたリソースを最大限に現場で活用できるような体制も必要となっています。現場のスタッフやカウンターパートの団体もし くは住民など、将来的に誰が事業を引き継いでいくのかなどを意識しながら、その時点での最良の判断ができるように心がけ ています。たとえば、PWJ は 2010 年 1 月に発生したハイチの震災に対応した支援活動を約 2 年半継続し、2012 年 7 月をもっ て終了しました。地震直後の緊急期にはガレキを撤去するためのツールキットなどを配布し、そこから被災した学校の再開支 援として、のべ32校207仮設教室の建設を行いました。災害前からハイチが課題としていた貧困や衛生問題には直接関わり

ませんが、緊急支援から復興支援へと移り変わろうとしているハイチにおいて、PWJ としては被災学校の再開支援のニーズを満たしたものと判断し、ハイチにおける支援 活動を終了しました。

国際社会における NGO の役割

紛争による難民流出や大規模災害など、その国の政府機関や民間組織が抱えきれな い大きな問題が存在するなかで、日本としては一体何ができるのか。国際社会の中で の日本のプレゼンスを高めていく必要を感じています。政府の目的とすれば資源外交 という経済的観点や、安全保障といった局面につながるのだと思いますが、NGO とし ては「必要な人々に必要な支援を(PWJ のミッション)」届けるための人道支援が目 *写真(上)PWJ から提供されたミシン 的となります。政府機関などがカバーできない現場のニーズに対して、機動性に優れ た NGO が柔軟に対応し、ギャップを埋めるという役割を担っていると思っています。



そのうえで、人材が育ち、インフラなど基礎基盤を整備されることで住民の収入が向上し、ビジネスと結びつきができるな常 に私たちの支援活動がもたらす効果も意識するようにしています。一方でこうした公益を担う役割を果たし、NGO としての存 在意義を社会へ認識させるためには、社会での諸問題に対してアンテナを張り巡らせ、情報を取捨選択する力、予測する力を もたなくてはいけません。現在は、次に大規模災害が起こった時に備え、私たちが試金石となり、より良い形で初動対応を行 えるような訓練活動などを行っています。NGOとして事業を組み立てる際には、こうした先見性が問われることも確かです。

国際社会への発信と企業との連携について

日本の現状として、国の財政事情からも政府の ODA が飛躍的に伸びることが期待できないこと、国内の産業が空洞化し人口 が減少していけばどんどん経済が縮小します。景気後退とともに、個人や企業からの(緊急時以外の)寄付も大きく見込めな いことが予測されます。そんななか、日本の社会問題への対応はもちろん、国際協力分野でも日本の NGO がイニシアティブを どうとっていくのかが問われており、そのための環境構築の必要性を大きく感じています。とりわけ、東日本震災での支援活

動を通じて、NGO が民間企業と連携をはかることで、知識や技 術、人材やネットワークなどの資源を結集させ、公益に資する大き な力となることを実感しました。

資金調達に関しては、日本という枠組みを超えて考える姿勢が必 要となるのではないでしょうか。日本国内のみならず、近隣のアジ ア諸国やアメリカなど欧米からも資金などのリソースを呼び込む体 制作りを整え、NGO が成長への歩みを続けられるよう、そのチャン スを享受できることが望ましいと思います。そのためにも、日本国 内はもちろん、国際社会へも広く自身の活動やその意義を発信して いく必要があり、NGO という従来の枠組みを超えたネットワークを 築きながら、人道支援においてイニシアティブをもって取り組んで いくべきではないでしょうか。



取材協力:PWJ 山下智子さん インタビュアー: IPF 学生 Net 伊藤



アジアでの活動・スリランカ

写真(上)紛争被災者を対象に、 山羊の配布を通した生計回復支援を実施中(パキスタン)。

2004年のインド洋津波の際に、甚大な被害を受けたスリランカへ出動し、南部の被災地ハンバントタ県を拠点に、津波被災者緊急支援を開始しました。この地域は、漁業と農業が盛んでした。多くの人が津波で家族だけでなく、仕事までも失ってしまいましたが、少し内陸に設置された再定住地区に移住した人びとが、一日も早くもとの生活に戻れるように、JENでは、漁業・

農業従事者を対象に農業支援活動を行いました。このころ、東部および北部は20年以上に及ぶ民族紛争の真っ最中でした。ハンバントタでの支援活動が着実に効果をもたらし始めた2007年、紛争避難民の帰還が始まった東部での活動が可能になりました。そこで、拠点を東部バティカロア県に移し、津波紛争被災者を対象にした支援活動を開始しました。

東部は、津波後3年が経過していたにもかかわらず、津波の傷跡が残ったままでした。また、20年ぶりに故郷に戻った人びとは、ゼロから生活を再スタートしなければならない状況でした。紛争の間、家族を失ったり危険な目にあった人も多くいます。そんな彼らには心理的なサポートが必要でした。そこで、生業である漁業への支援活動と食生活を改善するために農業支援を行い、同時に勉強会などのワークショップを定期的に開催することによって、自然に心が回復してゆくことを目指しました。現在は、地域毎に設置している農業用井戸の修復をはじめ、苗の配布、植え方、育て方、農薬の蒔き方、収穫方法をワークショップを通して伝えています。

以下は、実際にハンバントタでの活動でもたらされた効果ですが、 収穫した作物をまずは自分たちで食べます。収穫量が増えてくると、 親戚や隣近所の人におすそわけします。さらに、余るほど収穫できる と、市場で売ってお金にする人が出てきます。中には事業拡大を実現 する人もいました。このように、東部と北部に帰還した人びともまた、 農業を糧に支援に頼らなくても自立した生活を営む日がくることを願 っています。

©JEN

© JEN

(スリランカ北部)。

写真(上・下)生活の再スタートは、

農業用井戸の修復と水の確保から

2009年5月、ようやく北部で停戦が実現しました。20万人を超え

る避難民が、ワウニア県の避難民キャンプで生活していました。彼らは、故郷に戻ることになりますが、JEN では、当面の生活環境、特にキャンプ内での衛生環境の改善に着目しました。水道局と調整を重ね、キャンプに暮らす人を対象に不足する日用水を定期的に供給する給水支援を行いました。現在では、出身地に帰還した人びとを対象にした生計回復支援として、紛争中に破壊され、使用できなくなった井戸を修復し、生活用水を確保しています。

~世界の潮流を見据えて~

JEN の目指す自立とは



JEN が緊急時から自立の支援を行うのは、いずれ復興をむかえる際、コミュニティが現地の人主導で持続可能に機能する基盤ができるようにするためです。村長などの村をまとめる人びとをはじめ、女性や子どもに至るまで、あらゆる人たちに寄り添い声を聞くことを心がけています。日々の触れ合いをとおして、元気のない人には元気になってもらえるような仕掛けをつくり、コミュニティ形成においては、人びとが気軽に参加できるような場を提供します。JEN の自立の定義では「自分の周りの課題を見つけることができる。自分たちでその課題を解決することができる。課題を解決するために周りを巻き込むことができる。」の3つに重点を置いています。

事業を継続していくために

被災した地域で活動する際に常に意識していることが2つあります。1点目は、その活動が現地の人びとやコミュニティの 自立に必要かどうかです。

活動では、現地の人びとが参加しやすくなるように心がけます。そして、JENが去った後も、現地の人びとの手で、コミュニティ

を更に活性化してもらえるよう、その基盤作りをサポートします。2点目は、スタッフに身の危険が及ばないかどうかです。特に、自然災害あるいは紛争による緊急支援では、治安の状態が不安定な場合があります。その際、身の危険を最大限に防ぐために、様々な準備を行います。たとえば、アフガニスタンやイラク支援における隣国からの遠隔管理です。スタッフの安全を守ることが出来なければ、現地での活動は続けられません。そうなれば、その地域の復興が更に遅れてしまいます。支援を円滑に進めるためにもスタッフの身の安全を守ることはとても大切です。



写真(上)活動に参加している現地の人と JEN スタッフ(スリランカ)。

国際協力における市民社会との連携

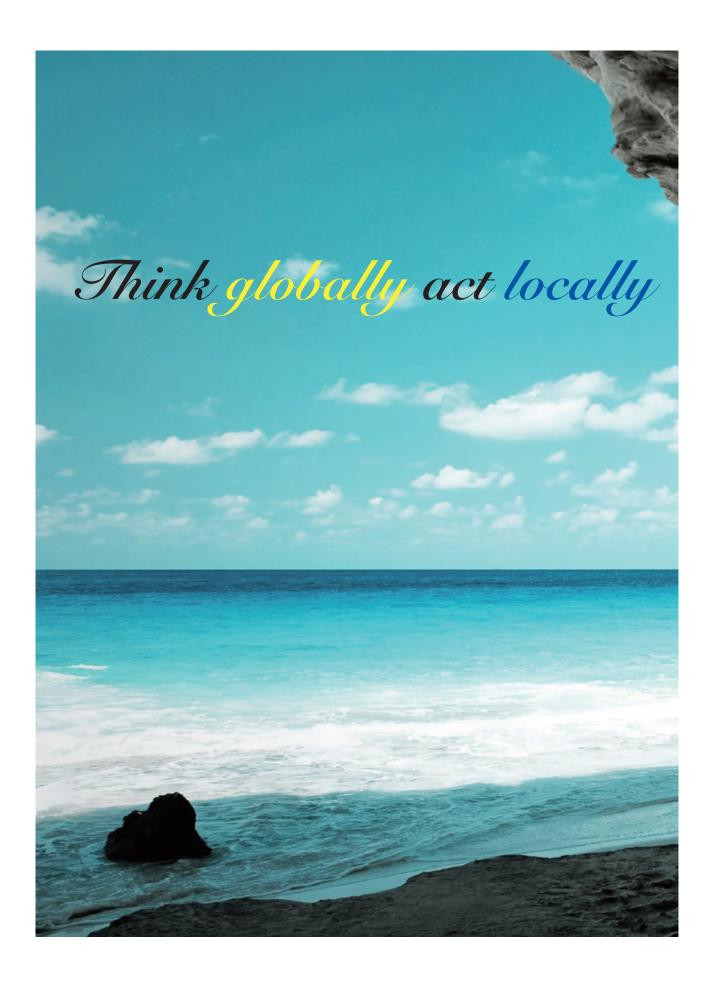
近年、国際協力の分野においてその仕組みや位置づけが目まぐるしく変わってきた印象が有ります。JEN は、緊急支援を専門にする国際 NGO ですが、設立当初は、「難民支援」という大きなミッションがあり、それが、私たちが専門にする国際協力でした。新潟県中越大震災を機に、2004年からは日本国内においても緊急支援に出動しています。特に、東日本大震災においては、これまで海外の緊急支援で培ってきた専門性を有効に活用できるよう、また、この大災害に関心を持っていただけるよう、国内外のステークホルダーに広く協力を呼びかけました。被災した市民に寄り添い、もとの生活に戻ることを支えること、その過程に、多くの市民が自分毎として参加できる環境を提供することは、JEN のミッションである平和な社会づくりに欠かせません。また、そこに国境はありません。

そんな中、中間支援組織である JPF と連携することは緊急事態が起きた時に、より早くより柔軟に、よりよい支援を日本から届けることができ、大きな支えになっています。 JPF が得意分野を有するプロフェッショナルな NGO をまとめて、より力を発揮できるような強みを常に持って、より広く深く活動ができるような環境づくりができるようにしてほしいです。

一方で、具体的な緊急支援活動では、支援のクオリティと スピートを保つためにも、JPF の特性を活かしたより柔軟な対 応を期待します



取材協力:JEN 濱坂さん ルークさん インタビュアー:JPF 学生 Net 伊藤





Youth for 3.11



東日本大震災と Youth for 3.11 設立

*写真(中央)瓦礫撤去の様子

(右下) 震災支援に携わる学生達

震災が起きた当日の夜に Youth for 3.11 (以下 Youth) は立ち上がりました。震災後、学生がボランティアに行きたくても実際に行ける環境が準備されているわけではありませんでした。そこには多くのハードルがありました。ボランティア自体が一般的ではなかったこともあって、どうやってボランティアに携わってよいのかわからないという不安や、学生達が NPO などの社会人達の運営するメンバーと一緒に活動していくことへの不安など、精神的な部分でバックアップが必要でした。また、寝袋などの準備が出来ている人は少なかったため、それらの準備も Youth が担うことにより、時間さえあれば誰でもボランティアに行くことができる体制を整えました。また、学生達がボランティアを行うにあたって宿泊費や食費など合わせて一週間 5万円くらいかかるので、この状態では本当に使命感がある人しかいかないという現状がありました。そこで Youth はそれらのハードルをすべて取り除くことで、1週間 0円から学生が気兼ねなく参加できる仕組みの提供しました。

ボランティアにおける学生

学生がボランティアに参加すると本当に力になってくれます。また 大学生は東北に全然いないので、遠くから足を運んでくれる学生の力 は非常に頼もしい存在でした。学生は強く一番役立つのではないかと 思います。全部できないからこそ、自分ができないということを認識 することで、今後自分がどのような人間になっていくのか考えてくれ ます。時に挫折を感じ、今すぐ問題を解決する事はできないけれど、 今後のために何か得て帰ってきますという姿勢は、数十年後の日本を 変えられる存在へと成長していけると思います。今、若い力が必要だ からこそ、学生に参加しやすい団体として機会を提供し、学生が社会 問題に参画できる社会を実現することを目指しています。



*写真(上)田んぼの瓦礫撤去と泥かきを行う学生

活動の出発と見えた存在

個人的にボランティアに対して、あまり良いイメージがありませんでした。そんな中で、震災があまりにも被害が大きかったので、自分も何かしたいなと思い、とりあえず現地に行ってみなければと思いました。去年の7月に初めて現地に行きました。私の中で震災についての衝撃は当日よりも、現場に入った時に大きく感じました。テレビの中では知っていた事実でしたが、実際現地で瓦礫の片付けを行っている最中、片付けているところは一体何なのか想像することできませんでした。片付けを続けていくと、お茶椀だったり、女の子の服だったり、色んなものが出てきて、ここの家が見えてきました。瓦礫の中には、暮らしの証があったことをテレビを通して気づくことができませんでした。

机上を越えて活動する若者たち

現地と繋がり続ける

Youth for 3.11

Youth が最も意識しているのが継続性という部分です。すでに一年半、毎週学生を導入する際に赤い帽子をかぶって仮設住宅のボランティアを行っています。参加した学生が帰り、新たな学生ボランティアが来ると、現地の方々は初日から仲良くしてくれます。それは Youth が赤い帽子をかぶって活動してきた 1 年半があったからこそです。今週来た学生ではなく、震災当初から長い間私たちに携わろうとしている Youth の学生さん達が来てくれたと、現地の人たちは捉えてくれます。すごく信頼関係が構築できているなと実感します。また現地を応援するために Facebook グループで参加者・OB・OG との間にネットワークを構築しました。毎日日報が送られることで「今日は何をしたのか、こんなことがあった。」など活動写真をあげてもらい「先週畑を耕した人の種が今は開いています。」など、現地がどのように変わってきているのか日々参加者も知れるようになりました。ちょうど最近は植えたヒマワリの芽がでたということで、種を植えた人はものすごく喜んでいて、これも youth の継続した活動があったからこそ得られることだったと思います。

ボランティアに対するまなざし

ボランティアはボランティアでしかないです。学生は雇用がないことに気づくけど雇用を作れませんし、人員が必要とされているけれど、手助けでしかなく、一から創り出すことができない感じがします。その中で、大人のサポートがあったからこそ Youth は立ち上がることができました。学生の「何かしたい」という動きへのサポートがあったからこそ、学生が活動したことで何かが変わる世界もあることを示すことができたのだと思います。全部を全部受け入れることは難しいけれど、応援

してくれる人達がもっと増えてきてもよいのかなとは思います。当初、Youth はかなり批判されました。ボランティアが現地の復興を妨げているという意見があり、それは現地の人から聞いたことはありませんでした。そのような発言は東京で何もしていない人達の発言であってあまりかっこ良くないなと思います。学生が変なことをやるなとブレーキをかけてくることはナンセンスだと思っていて、あくまで軌道修正するような大人が増えてきてほしいと思います。

ボランティアの概念を変えたいと思っています。ボランティア参加者 が口々に言うのが、「ボランティアへのイメージが変わった」「自己犠牲 や、偽善だと思っていたけど、本当に感謝してもらえた」「楽しかった」 「たくさんの事を学んだ」といった、プラスの印象です。今まで「ボラン



*写真(上)出発前のミーティングの様子

ティア」という行為へは良い事だという認識はあるものの、学生にとってはなぜかマイナスイメージが多くあります。だからこそ、今後はボランティアのイメージを変えていき、学生がボランティアとして社会問題に取り組むことをもっと一般的にしていきたいと思っています。

震災支援と国際協力

震災支援も国際協力も一緒だと思います。目の前の人達を救うというのは国が違っても一緒だと思います。一方で、関わった責任というものはあって、国際協力で支援したいということによって、自立を妨げることもあります。震災後は、学生団体

が乱立して動きを止める団体も沢山ありました。それは非常に 残念で、資金繰りなどで止まってしまったところもあるそうで す。けれど個人的には、どうやったらそれを解決できるのか 全力で向き合いたいと思います。

ある人に聞き共感した話があります。日本人のNGOスタッフがある村へ支援しに行った時、少年がNGOの備品を盗んでしまい、村から追い出されました。彼が善意ゆえに現地のために支援を開始したことが、結果的にその少年の未来をつぶしてしまうことに繋がってしまったのです。その方は未だに後悔しています。だからこそ、自分が現地のために何かしたいのであれば、そこで起きることも弊害もすべて受け入れるという形で活動しなければならないと思いますね。



取材協力: Youth for 3.11 代表 島田悠司さん インタビュアー: IPF 学生 Net 武井

Habitat MGU



Global Village Program

*写真(上)活動する学生達と子ども達(フィリピン)。

Habitat MGU(MGU)は年に2回、Habitat For Humanity(HFH)の主催する Global Village Program(GV)に参加しており、世界中にある HFH の事務所と連携して行なう $7 \sim 10$ 日間の海外建築ボランティアプログラムで、毎回 MGU の中から $1.5 \sim 2.0$ 人のチームを作り、さまざまな国で建築活動を行っています。HFH の GV 活動は自立支援とコミュニティの構築を目指しています。新しく家を手に入れる家主は、建築費の 3.0 0.1 を HFH と無利子無担保でローンを組んで自力で返済していきます。また家主自身も世界中から来たボランティアと共に自ら自分の家の建築活動に参加します。家主はただ HFH から無償で家を提供されるのではなく、自ら自分の家を建て、そのコストを返済していくことで、家への愛着と家主自身の自尊心を高めることができるのです。住居建築はすべて手作業で行われ、私たちボランティアも建築活動に関しては素人ですが、現地の大工に指導をもらいながら、家主、ボランティア、時には地域の人々と共にひとつの家を建てることで、多くの人のいろんな思いが詰まった家が建てられるのです。また、そうして地域の人々と共に建築活動を進めていくことで村への愛着がわき、それが平和なコミュ

ニティの構築につながります。GV は家を建てる活動ですが、ひとつの家をつくることで、その家をつくるにあたって生まれる多くの想いがひとつの村をつくっていくのです。私たちハビタット MGU は、ただ現地に行って家を建てて帰るのではなく、渡航前はその国やコミュニティを学び、また帰国後は現地で感じたことや学んだことを発信していきます。地域の人々や同年代の人々に私たちの活動を知ってもらうことで、国際協力や住居貧困問題について少しでも関心をもっていただけたら、そしてそれが現地への Action につながったらと思っています。



*写真(上)GVプログラム・完成間近の家と学生達

フィリピン・パートナーシップ・プロジェクト

(フィリピン)。

母体の Habitat が GV で作ったフィリピンの村があり、その村を長期的に支援していこうというプロジェクトです。家を建てた上で、更に可能性を広げるプロジェクトで、村の自治能力や村への愛着心を高め村を活性化させていく取り組みを10年契約で、村と現地 NGO と MGU とで協力して活動しています。なかでも力を入れているのがクロスステッチプロジェクトです。クロスステッチ (手縫いの商品)を村の女性たちが作り、日本とフィリピンで販売路の開拓を行っています。数店舗に置いていただき、売上の4割が労賃として彼女たちの収入になり、学費・教育費・食費や家の修繕費に充てることが出来ます。売上の5%は村に還元され、公園、コミュニティーセンターなどのインフラ関係の建立ができるようになります。しかしクロスステッチ商品を売るには、販売路が必要です。現在は MGU が商品を購入して日本の国際フェスティバルなどで売る、つまり仲介役を担っています。もし私たちが商品を購入しなければクロスステッチの利益は得られませんが、それでは村の自立につながりません。そこで、新たな販売路としてネット販売を始めました。ネット販売の運営、商品自体のブランディングは彼女たち自身の運営に任されています。フィリピンでのプロジェクトは5年契約で現在4年目を迎え、5年経つと私たちは撤退する予定です。そのためか、これまでは MGU が主体的に活動をしてきましたが、現地の女性たちが少しづつ自分たちで活動を運営できるようになってきました。活動を通して女性たちに自尊心が生まれていることも成果の一つだと言えますし、嬉しく思います。

机上を越えて活動する若者たち

現地との関係性を絶やさぬように

私たちは1年に2回このフィリピンの村を訪問していますが、春の訪問の際に村でお祭りを行って habitat mau います。村にユースの自治会を作り、Habitat MGU と協力してお祭りを運営しています。ユースの自治体が企画書を作って、 当日も彼らが中心になって運営する体制にしています。この取り組みによって、将来村を支える若い力が養えればいいなと思っ ています。大学生は個人レベルで言うと4年間しか活動できません。毎年毎年人が入れ替わるので、現地との協力体制が必要 不可欠です。現地の人達とハビタットを繋げるために、フィリピン大学に留学している日本の学生に毎年駐在員をお願いして います。駐在員は週1回のペースで村に訪問していて、スカイプで月に2回現地の情報などを日本にいるメンバーと共有をし ています。また、村でニーズ調査を行っていて、そこから得たヒントから新しいプロジェクトが始まったり、どんなことが一 緒にやれるか常に考えています。

活動の継続件と壁を乗り越えるために

最初にプロジェクトを開始した人達が見ていた景色と今起きて いる現状はまったく違っています。プロジェクトの撤退の条件や 計画の達成の条件があり、そこを目指しているけれど実際にプロ ジェクトをやっていると、思うようにうまくいかない面もあり難 しいです。例えば、クロスステッチプロジェクトを継続させてい くにはやはり販売路の拡大が必要で、現在 MGU がすべての商品 *写真(上)出来上がったクロスステッチを持つ村の女性達 を購入していろんな店に卸す仲介役になっています。プロジェク



(フィリピン)。

トの先を見据えて考えると MGU がすべての商品のバイヤーではなく1バイヤーとして存在して、他の販売先が直接買う事が できる体制を構築する必要が出てきます。また、最終的に現地の女性達だけで運営していくことを考えると、日本に向けて商 品を販売して行くのは限界があり、フィリピン国内に対しても販売路の確保が必要だなと認識しています。幸いにも1店舗の 確保が実現しましたが、日本向けに売っていた商品を現地向けに置き換えるとすると非常に課題があります。打開策として、 現地の女性たちも担えるようにネット販売を導入して、販売の拡大を試みようとしています。

活動を突き動かす思い

GV での活動はすべて手作業で一つのお家を建てます。多額の資金・たくさんの労力や時間を使っても、手作業なので壁や土 台を作ることしかできず、ひとつの家を完全につくることはできません。しかし、世界中から多くの人が、学生達が、家を建 てるために集まります。一見非効率的なことに思えますが、みんなの手作業によって作られた家は、ボランティアの人にとっ ても家主にとっても、単なる物質的な家ではなくて、想いが詰まった家になります。家主さんも想いが詰まっているから、ロー ンを返そうという気力が生まれるし、それは自立に繋がります。

暑さのなか、汗びっしょりになりながら、自分の一掻き一掻きが、一つの家に繋がると思うと私自身すごく幸せをかんじま した。私たちの作っている家が家族を幸せにできる=自分の小さい作業が世界中を幸せにする可能性を持っていると、初めて ハビタットの GV に参加したときに実感することが出来ました。キリスト教の理念に基づいているけれど、私が GV で参加した インドネシアはイスラム教です。世界ではキリスト教とイスラム教は対立しているように見えるけれど、作業をする上で、宗 教は関係なく、全然仲良くできるじゃん(笑)って、みんなで一緒に生きていけるじゃんって実感しました。

ボランティアに関わっているとよく周りから偉いねと言われる ことがあります。でもボランティアって人間に本能的に備わって いるものだと思います。ボランティアは特別なことではなく、自 分のやっていることは美しいものでもないと思っています。ただ 世界中の人々と共に生きていきたいと思っている、それだけです。 隣の人がけしごむを落としたら拾う。このこととボランティアは 何も変わりません。重要なのは、それを行動に移せるか移せない かただそれだけだと思います。もっと人間同士で助け合えば、も っと住みやすい世界はできると信じています。そして、すでに動 いている人が、動いていない人へアプローチすることで火をつけ ることが大切なのかなと思います。



取材協力: Habitat MGU 副代表 太田輝さん インタビュアー: JPF 学生 Net 武井



編集後記

大学生である私達は、目を凝らしてみると様々な現実や問題に出会う機会が 多くあります。現在はグローバル化が進み、私たちは以前よりも容易に、海外に アクセスすることもできるようになりました。

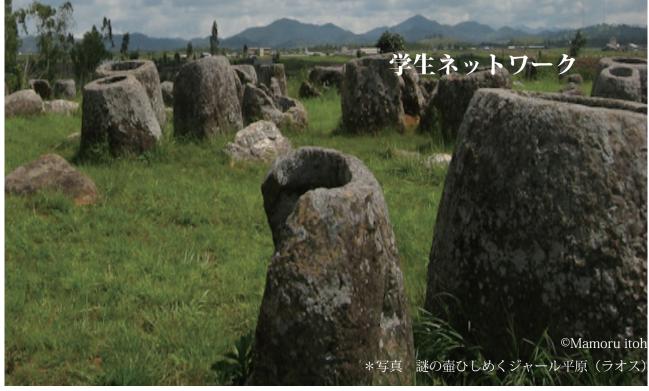
大学に通う4年間、私たちの身の周りには魅力的な事や物が溢れていて、自分 の選択によって、いくらでも中身の違うものになります。

大学生活の4年間を過ぎれば、自分の関心や興味だけを純粋に追うことはできなくなり、自由に物事を考える時間はどんどん減っていきます。

この貴重な4年間程、恥をかき、困難な現実と向き合い、傷だらけになりながらも成長できる時間はありません。なにより自由に考え、学ぶことが出来る時間は大学生に与えられた特権とでも呼べるかもしれません。

同じ悩みを抱えた大学生として、この「Blau」が「国際協力」という側面において、少しでも役に立つことができれば、とても幸せです。

今後、「Blau」は皆さんと伴走していけるような広報誌を目指していきます。



次回 ADRA JAPAN etc.....





e our Relation Mamoru itoh

後援 JAPAN PLATFROM

協力 **Peace Winds Japan JEN** Youth for 3.11 Habitat MGU

作成者 JPF 学生ネットワーク